

紫の火花

藤澤南 浜田 義一

アーノルド・トインビーは対談集「未来に生きる」の中で、「私が尊敬するのは、自己中心性から自らを解放した人物……いや、自らを解放したというよりも、愛によって自己中心性から解放された人物です」と語っている。これはトインビーのモットー「愛に従え、たとえ愛が自己犠牲に導こうとも」の当然の帰結であろう。彼はこのような人物として、アインシュタイン、パスカル、聖フランチェスコや、ダンテ等の名前をあげている。宇宙の事や数学の探求、宗教、芸術への没入、それぞれに道は異なっているけれども彼等はひとしく自己解放をなしたとげたのである。

トインビーが、この世で実際に逢うことができたのは、アインシュタインだけであったが、その質朴さ、謙虚さ、私心のなさをトインビーは称えているが、実は、その賛辞こそ、トインビーを知る人々が皆彼に捧げた言葉でもあった。

このような自己中心性を超えた愛の精神は、彼等創造的少数者だけのものであり、社会不安と不信と公害と、日々の糧に追われて

いる我々にとっては、ユートピアの中の夢物語であろうか。否、事情は全く逆。末世なればこそ愛が求められるのである。私はロータリーの決議二二―三四を想い出す。「ロータリーは、自己の為に利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起る争いを和解させようとする人生の哲学である。P・ハリスや何人かの先輩たちは「超我の奉仕」を実践した。それは愛による自己中心性からの解放であった事をいくつかのエピソードが伝えている。そして彼等は「多く報いられた」しかしこれは我々にとって容易な道ではない。

ほかならない、トインビー自身、自らのモットー「愛に従え」に恥じないよう全力をつくしているが、言うは易く、行なうは難しで、人間の弱さ、自己中心性、罪深さという「自己自身とのたたかいは永久に続き生命が尽きるまで終わらないのです」と、この八一年歳の碩学は語っているのである。彼の思想は何とロータリーに近く、彼の言葉は我々の心に滲みる。彼はまた生物は死をまぬがれ得ない。人間もその例外でない以上、この事実からだけでも、自己中心性は一貫させることはできない。人間はできるだけ死を忘れようとしている。しかし、人生の決定的瞬間には自己中心性の皮肉に気づき、そのむなしさに直

面して苦しむのだ、とのべている。我々は愛するものの死に直面したとき、このトインビーの言葉をしみじみ理解できるであろう。私はまた、自己中心性からの解放……それはまだ十分なものであるが……は人類の歴史の流れにそったものと思う。

地球中心から地動説へ、地球は太陽の一家族に過ぎなく、太陽さえ銀河系の周辺に位置する二千億個の中の一微粒であり、さらに銀河系も茫たる宇宙の中の片々たる一小島にすぎないという宇宙観の変化、さらに地球上の生命は宇宙の中の特別な存在であったし、その霊長である人間は宇宙に冠たる価値をもっていた。しかし今や宇宙にはその他の生命の存在が語られ、人間はその特権的位置を放棄した。このような大きな思想上の変化は、人間の自己中心性の放棄を物語っている。

一方、人間の業は、地球上のあらゆる有機物、無機物を、ただ自らの為のみ存在するとし、余す所なく搾取した。この自己中心の思いがかりは、今や大きな傷手となって人間自身にはねかえっている。

私は自己中心からの脱却が、未開以来の人類の、人種、社会、国家、政治の面でも萌え初め開花しつつあるように思う。そのおもむく所こそ真の平和への道であり、偉大な人類文明史の探求者であり、総合的歴史学者であ

るトインビーのいう通り、個人と共同体双方の自己中心性の克服なくしては実現できないであろう。

さて「紫の火花」は、数学者岡潔先生の随筆集の名からとったが、芥川龍之介が雨の町を散歩している時、電線が切れて紫の火花を発しているのを見て、他の何物を捨ててもこれだけは残したいといった。その話から命名されたという。岡先生は幼年時代に、祖父から「他人を先にして、自分を後にする」ようきびしく戒められたという。人の人たるゆえんは、思いやりの心である。今の教育は誤っていて、若い人達に思いやりの心がなくなり、動物的衝動にかられ易くなった。思いやりの心を高めることは、情操、情緒を高めることであり、情緒を高めその心境が高まると、道は自らひらけてくる。夏目漱石の創作態度はそれであり、一作毎に心境を高めていった。数学の研究もまた然り。数学の目標は真の中にある調和であり、芸術の目標は美の中にある調和である。

どちらも調和であり、そこに働いているのは情緒である。このように岡先生は述べて居られる。「紫の火花」(それは萩原朔太郎の「黒猫」のイメージでもあるが)を感得する心は、思いやりの心に通じ、情緒を高めるよすがとなり、岡先生の数学を偉大なものにし

たのであろう。「紫の火花」は、自己中心性からの解放の光源である。(静岡県・図書館)